様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月　 １ 日現在

機関番号：１７１０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ０２４８２

研究課題名（和文）現代ロマンス諸語におけるテンス・アスペクト体系の対照研究

研究課題名（英文）A contrastive study on the tempo-aspectual systems in the Romance languages

研究代表者
山村　ひろみ（Yamamura, Hiromi）

九州大学・言語文化研究院・教授

研究者番号：９０２８１１８８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は現代ロマンス諸語のうち代表的な、フランス語、イタリア語、スペイン語、ポルトガルポルトガル語、ブラジルポルトガル語、ルーマニア語のテンス・アスペクト体系の対照研究である。これら６つの言語のテンス・アスペクト体系を記述的に考察するために、本研究はまずAgatha ChristieのThe Thirteen Problemsの各言語訳と原本のパラレルコーパスを作成した。次に、同コーパスを用いて、①各言語における「大過去」の記述および分析し、従来指摘されることのなかったロマンス諸語間のテンス・アスペクト体系の異同を具体的に示すと同時に、②各言語に特有のテンス・アスペクト現象の再検討を行った。

研究成果の概要（英文）：This research is a contrastive study on the tempo-aspectual systems in the six Romance languages; French, Italian, Spanish, European Portuguese, Brazilian Portuguese and Romanian. First, we made a parallel corpus composed of the translations of the six languages of the novel Thirteen Problems written by Agatha Christie. Then, based on the parallel corpus, (1) we made a detailed description and a contrastive analysis of the "past perfect (pluperfect)" in the said languages, which demonstrates concretely the differences and similarities of the tempo-aspectual systems in the said languages which had never been pointed out in the literature, and (2) we reconsidered tempo-aspectual phenomena proper to each language.

研究分野：言語学

キーワード：ロマンス諸語　テンス・アスペクト　対照研究　パラレルコーパス

１．研究開始当初の背景

従来のロマンス諸語の対照研究は、通時的研究であったり、各ロマンス語の現状を表面的に記述したものが多かった。その結果、ロマンス諸語のある特定の言語の様相がロマンス諸語全体を表すものとして提示され、その偏った資料を基に一般言語的な議論が行われるという弊害が繰り返されてきた。その傾向は特にテンス・アスペクトの分野において著しかった。そのような背景から、本研究は、現代ロマンス諸語の実際の姿を、その異同が特に際立つテンス・アスペクト体系の観点から詳細に記述・分析し、現代ロマンス諸語間にある相違点と類似点を明示すると同時に、その異同が各言語のテンス・アスペクト体系のどのような特徴に基づくものであるかを解明していくことにした。

２．研究の目的

本研究は、俗ラテン語をその母体とするロマンス諸語のうち、代表的なフランス語、イタリア語、スペイン語、ポルトガルポルトガル語、ブラジルポルトガル語、ルーマニア語のテンス・アスペクト体系の対照研究である。これまでロマンス諸語の対照研究は、まさにその系統的類似性から等閑視されてきた。しかし、ロマンス諸語の体系の展開には当然各語に共通の部分と各語独自の変化を遂げた部分がある。本研究は、そのようなロマンス諸語を、その異同がもっとも際立つと思われるテンス・アスペクト体系という観点から実証的に対照・分析し、ロマンス語学のみならず一般言語学にも役立つ資料を提供すると同時にテンス・アスペクト分野における理論的貢献をなすことを目的とするものである。

３．研究の方法

対象とする 6 言語のテンス・アスペクトの類似点と相違点を具体的に提示するために、まず、Agatha Christie の *The Thirteen Problems* の原本と当該 6 言語の翻訳からなるパラレルコーパスを作成した。次に、このパラレルコーパスを用い、当該 6 言語のテンス・アスペクトの振る舞いの異同を具体的に探るための対象として「大過去 (past perfect, pluperfect)」を設定し、①各言語における「大過去」の機能の一般的規定、②同コーパスにおける主文中の出現頻度、従属文中の出現頻度を記述分析した。この結果は本報告書の〔その他〕に記載された各論文に詳しい。また、同コーパスを用い、これまで指摘されることのなかった各言語に特有のテンス・アスペクト現象が考察されたが、その成果は本報告書の〔雑誌論文〕に記載された論文に詳しい。

４．研究成果

本研究の成果の中で特筆すべきは、フランス語、イタリア語、スペイン語、ポルトガルポルトガル語、ブラジルポルトガル語、ルーマニア語という 6 つのロマンス諸語および英語からなる約 7 万語のパラレルコーパスを作成したことである。このように多くのロマンス諸語と英語の異同を一目で確認することのできるパラレルコーパスは、管見の限り、国内外ない。次に、このパラレルコーパスを用い、当該 6 言語のテンス・アスペクトの異同を「大過去」の振る舞いという観点から具体的に記述・分析することができた点は、ロマンス語学のみならず当該 6 言語のテンス・アスペクト研究に大いに寄与すると思われる。ただ、本研究の期間は 3 年間と短かったためやり残した点も少なくない。特に、本研究では、近年研究が盛んな、半過去・未来形・条件法とモダリティとの関係、また、複合過去・未来形・条件法とエビデンシャリティ（証拠性）について触れることはできなかった。そこで、この点についてさらに研究を進めるため、本研究の発展的展開として、平成 30 年から平成 34 年の科研基盤研究(B)「ロマンス諸語におけるテンス・アスペクト・モダリティ・エビデンシャリティの対照研究」を申請し、採択された（課題番号 18H00667）。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 40 件）

1. Hiromi YAMAMURA (2018):“Un estudio contrastivo-descriptivo de la perífrasis española “estar+gerundio”, la perífrasis portuguesa europea “estar a+infinitivo” y la perífrasis portuguesa brasileña “estar+gerundio”,『言語科学』第 53 号, 65-88.
2. Hiromi YAMAMURA (2018): “ Un estudio contrastivo-descriptivo de la perífrasis española “ estar+gerundio ”, la perífrasis italiana “ stare+gerundio ” y la perífrasis francesa “ être en train de+infinitif ”, 『言語文化論究』No. 40, 85-101.
3. 鈴木信吾(2018): 「ルーマニア語の間接話法における時制の照応の仕方について ― アガサ・クリスティ短編集の英語原文とルーマニア語訳文の 対応関係をもとに ―」『天野惠先生退職記念論文集』京都大学文学部イタリア語学イタリア文学研究室.
4. Lucila GIBO (2018): “A alternância entre o perfeito e o mais-que-perfeito: metáfora temporal e mudança de ponto de vista” 『上智大学外国語学部紀要』, No. 52, 139-162.
5. 渡邊 淳也・小川 紋奈(2018): 「フランス語の単純未来形・前未来形と ロマンス諸語における対応形式の対照研究」渡邊淳也・和田尚明（編）(2018)『諸言語にお

ける TAME の発現について』筑波大学 TAME 研究会, 59-82.

6. HiromiYamamura(2017):"Características y función de la perífrasis "estar + gerundio", 『ロマンス語研究』No. 50, 11-20.
7. Lucila GIBO (2017): "As diferenças de uso entre as perífrases verbais estar+gerúndio, ter+particípio e andar+gerúndio observadas pela sua coocorrência com adjuntos adverbiais", 『ロマンス語研究』No. 50, 1-10.
8. 岸彩子(2017): 「「かいつまんで言う」ときの時制」『ロマンス語研究』No.50,.41-50.
9. 山村ひろみ(2017): 「スペイン語の estar+gerundio の特徴 −対応するフランス語・イタリア語の迂言形式との対照の観点から」『言語文化論究』No. 38, 85-97.
10. Hiromi Yamamura (2016): "Reconsideración sobre la función del pretérito perfecto simple en español—con especial atención a las oraciones imposibles—" *Cuadernos CANELA* Vol. 26, 127-139.
11. 山村ひろみ (2016): 「De Swart (1998) を読む−スペイン語 pretérito perfecto simple への応用から見えてくるもの−」『言語文化論究』No. 37, 21-35.
12. 儀保ルシーラ (2016): 「ブラジルポルトガル語の完了過去形の繰り返しが表すアスペクチュアルな意味と動詞の限界性」『ロマンス語研究』No. 49, 41-50.
13. 渡邊淳也(2016): 「En passant の文法化・語用論化について」『フランス語学研究』第 50 号別冊『パロールの言語学』, 153-167.
14. 岸彩子(2015): 「実体験知覚と共有知識—未来の事態を表すフランス語の直説法現在形—」和田尚明・渡邊淳也(編)『時制ならびにその関連領域と認 知のメカニズム』、2012～2015 年度 JSPS 科研費基盤研究(C)(課題番号 24520530) 「日英語ならびに西欧諸語における時制・モダリティ・アスペクトの包括的研究」による論文集
15. Jun-ya Watanabe(2015): "Gérondif « non-coréférentiel »" *Voix plurielles*, vol.12, no.1, 207-224.

〔学会発表〕(計 27 件)

1. 山村ひろみ(2017)「スペイン語の丁寧表現—「丁寧の線過去」と「丁寧の過去未来」」日本スペイン語学セミナー(SELE2017)
2. 山村ひろみ(2017)「スペイン語迂言形式 "estar+gerundio",イタリア語迂言形式 "stare+gerundio"およびフランス語迂言形式 " être en train de+infinitif"の記述的対照研究」日本ロマンス語学会第 55 回大会
3. ギボ・ルシーラ(2017)「ブラジルポルトガル語における単純大過去形，複合大過去形，及び単純過去形の交替現象についての一考察」日本ロマンス語学会第 55 大会
4. 岸彩子(2017)「フランス語の半過去と日本語のテイル—絵画的半過去に関する一考察—」日本ロマンス語学会第 55 大会.
5. 渡邊淳也(2017)「フランス語の単純未来形とロマンス諸語における対応形式の対照研究」東京フランス語学研究会第 35 回研究会
6. 山村ひろみ(2016)「スペイン語の迂言形式 estar+gerundio の諸特徴とその本質的機能」日本ロマンス語学会第 54 回大会
7. 渡邊淳也(2016)「En passant の文法化・語用論化について」東京フランス語学研究会第 25 回研究会
8. 渡邊淳也(2016)「フランス語半過去形と「叙想的時制」」日本ロマンス語学会第 54 回大会
9. Naoki Wada & Jun-ya Watanabe (2016) ""Be going to and aller": A temporal structure-based analysis of 'go'-futures in English and French", Chronos 12 (カーン・ノルマンディー大学，フランス)
10. ギボ・ルシーラ(2016)「副詞(句)との共起関係から見たブラジルポルトガル語の迂言形式，TP, AG の違いについて」日本ロマンス語学会第 54 回大会
11. 岸彩子(2016)「「かいつまんで言う」ときの時制—フランス語直説法現在形」日本ロマンス語学会第 54 回大会
12. Hiromi Yamamura (2015) "Reconsideración sobre la función del pretérito perfecto simple en español—con especial atención a las oraciones imposibles o casi imposibles de expresarse en el pretérito perfecto simple" Confederación Académica Nipona, Española y Latinoamericana (CANELA)
13. 山村ひろみ(2015)「点過去による表出の条件—出来事認識・メトニミー・メタファー」日本スペイン語学セミナー(SELE2015)
14. Jun-ya Watanabe (2015) " Gérondif « non-coréférentiel »" 日本フランス語学会研究促進プログラム「パロールの言語学」大阪大学ワークショップ
15. ギボ・ルシーラ(2015)「ブラジルポルトガル語の完全過去形の繰り返しが表すアスペクチュアルな意味と動詞の限界性」日本ロマンス語学会第 53 回大会

〔図書〕(計 7 件)

1. 筑波大学 TAME 研究会　渡邊淳也・和田

尚明（編）(2018)『諸言語における TAME の発現について』株式会社イセブ，88+vi
2. 渡邊淳也(2017)『コルシカ語基本文法』早美出版社，118
3. 渡邊淳也(2017)『ジェロンディフと現在分詞の意味論・語用論』デザインエッグ，184
4. Lucila Gibo (2016) *Diccionario Okinawano-Portugues*（沖縄語ポルトガル語辞典）朝日出版，297
5. 一之瀬敦，ギボ・ルシーラ，鳥越慎太郎(2017)『Boa sorte! Portugues para conversacao ボア・ソルチ！会話で学ぶブラジル・ポルトガル語』朝日出版，65
6. 山村ひろみ(2016)『スペイン語 24 課』白水社，61
7. 鈴木信吾・森川学(2015)『音楽のためのイタリア語入門』大学書林，180

〔その他〕
1. 山村ひろみ(2018)「スペイン語の「大過去」」科研成果報告 CD『現代ロマンス諸語におけるテンス・アスペクト体系の対照研究』所載
2. 岸彩子(2018)「フランス語の「大過去」Ⅰ－フランス語の大過去 Plus-que-parfait に関する先行研究」科研成果報告 CD『現代ロマンス諸語におけるテンス・アスペクト体系の対照研究』所載
3. 渡邊淳也(2018)「フランス語の「大過去」Ⅱ」科研成果報告 CD『現代ロマンス諸語におけるテンス・アスペクト体系の対照研究』所載
4. 小熊和郎(2018)「フランス語の「大過去」Ⅲ－アガサ・クリスティ『火曜クラブ』英・西・伊・伯・葡語との対照－」科研成果報告 CD『現代ロマンス諸語におけるテンス・アスペクト体系の対照研究』所載
5. 藤田健(2018)「イタリア語の「大過去」」科研成果報告 CD『現代ロマンス諸語におけるテンス・アスペクト体系の対照研究』所載
6. ギボ・ルシーラ(2018)「ブラジルポルトガル語の「大過去」」科研成果報告 CD『現代ロマンス諸語におけるテンス・アスペクト体系の対照研究』所載
7. 黒澤直俊(2018)「ポルトガルポルトガル語の「大過去」」科研成果報告 CD『現代ロマンス諸語におけるテンス・アスペクト体系の対照研究』所載
8. 鈴木信吾(2018)「ルーマニア語の「大過去」」科研成果報告 CD『現代ロマンス諸語におけるテンス・アスペクト体系の対照研究』所載

６．研究組織

(1)研究代表者
山村ひろみ（YAMAMURA, Hiromi）
九州大学・大学院言語文化研究院・教授
研究者番号：９０２８１１８８

(2)研究分担者
渡邊淳也（WATANABE, Jun-ya）
筑波大学・人文社会科学研究科・准教授
研究者番号：２０３４９２１０

藤田健（FUJITA,Takeshi）
北海道大学・文学研究科・教授
研究者番号：５０２９２０７４

岸彩子（KISHI, Ayako）
埼玉女子短期大学・教養部・准教授
研究者番号：８０７４９５３１

鈴木信五（SUZUKI, Shingo）
東京音楽大学・音楽学部・教授
研究者番号：４０３３８８３５

黒澤直俊（KUROSAWA, Naotoshi）
東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授
研究者番号：８０１９５５８６

ギボ・ルシーラ（GIBO, Lucila）
上智大学・外国語学部・講師
研究者番号：３０７３７２１８

(3)連携研究者
小熊和郎（OGUMA, Kazuro）
西南学院大学・文学部・教授
研究者番号：７０１６９２５９

大森洋子（OMORI, Hiroko）
明治学院大学・教養教育センター・教授
研究者番号：６０２３３２７７